

2月8日教科担任制推進委員会 議題				
	まとめ	市川中	市川東小	市川小
	Ⅰ. 今年度の成果			
Ⅰ-① 自校の成果	・各校で成果を上げることができた。	各自の授業力向上を目的に授業交流を行った。	・担任間の授業交換において、担当教科の授業力向上を目指し取り組みを進めることができた。 ・授業スタイルを統一する取り組みでは、授業の質の向上を目指し、教材研究を行った。	・教科担任による同学年の授業も担任間の交換授業も効果的だった。
Ⅰ-② 3校合同の成果	・顔合わせや研究授業・週一の参観が効果的だった。	・合同で研究授業を行い、これまで以上の視点で授業を観察することができた。 ・顔合わせから始まりブロックごとの研究まで、これまでにない取り組みができたことが成果である。 ・理科での同じ単元での研究授業は、小中それぞれの指導し方や児童生徒の着目の仕方の違いが見られ、教師の今後の指導に大いに役立つ場となった。 ・小学校の専科が週1回中学校にいらっしゃるスタイルが大きな成果につながった。毎週会うことが分かっているからこそ、見通しをもって打ち合わせを行うこともできた。	・小小連携における教科担任の授業は児童の学習への意欲が高まり、大変効果的だった。 ・小中学区の交流を、年間を通して継続的に行うことができ、今後の活動の素地ができた。 ・小中の系統性が見られる同一単元での研究授業を参観させていただき、小中連携のベースとなるものが明確化された。	・同一学区の小中が一緒になって教育を考える取り組みはかつてない取り組みであり、9年間を見通した教育の第一歩となった。 ・中学校の授業を参観でき、検討できたことは大きな成果であった。 ・小中の違いを感じるいい機会となった。基礎となる小学校での学びの大切さも改めて感じた。
	Ⅱ. 今年度の課題			
Ⅱ-① 自校の課題	・専門性を高め、授業力向上を目指す。	・授業交流に対する意識の向上。 ・小中9年間の単元配列表をもとにした、教育課程の研究	・小小連携の授業では、教科担任への引き継ぎやお願いが必要となるが、限られた時間の中で情報交換なので、内容が十分共有されず、準備が十分でないことがある。	・児童の情報を共有する方法をさらに確立していきたい。

2-② 3校合同の課題	・情報共有をしながらギャップを解消していきたい。（不登校の問題も・・・） ・地域ならではの困難さを抱えている家庭の保護者対応や関係機関への対応などを会議を開催するなどして密にしていきたい。 ・指導の方向性の確認。 ・小小の連携もしていきたい。（オンライン活用・南東間での交流を参考に市小と東でもやっていけるのではないだろうか）	・定期的に話し合う場が必要だと感じる。特にギャップ解消に関しては、アンケートの改善はもちろん、アンケートの結果から見える教師の指導の改善も話し合うことができたのではないかと感じる。	・情報共有の方法について課題が残った。	・研究を合同で行うという方法についてはよかったが、もっと共通理解を図れるようにしたい。 ・足並みを揃えることは大変だが、もっと話し合ったり協同研究をしたりする機会を増やしていきたい。 ・来年度は小小連携として、オンラインでの交流授業なども取り入れたい。
指導主事のお話	・フォーラムでも市川中学区の取り組みが注目されていた。 ・スタディログ（次の学年・学校へつないでいくことがICTならできる）			
	3. 来年度に向けて			
	A継続する事業の確認			
3-A-① 顔合わせ会	・継続	・必要だと感じる。グループごと話し合う時間を長くとりか、回数を増やすなどしても良いと感じる。	・顔や名前を紹介し合うだけでも壁が取り払われたような安心感がわいた。	・それぞれの学校の職員や所属学年等がわかってよかった。来年度、また職員が変わるので1学期にまたやりたい。できれば参集し、交流したい。
3-A-② ギャップ解消のための話し合い	・アンケート実施の前後に話し合い。生徒のアンケート結果を踏まえて話し合い。 ・アンケート担当者同士が直接つながると良い。（ブロックのつながり） ・タイムリーな話題だけでなく、日常的な課題、学校のルールなど気軽に話ができると良い。 ・まずは授業、学力向上。	・アンケートの結果から、ギャップの明確化と解消に向けての小中での具体的な手立てを考えていく必要がある。 ・アンケート実施の前後には話し合うようにすべきだと感じる。今年度は小中の研究主任が窓口となったが、それぞれのブロック長どうしが直接やりとりをした方がスムーズかつ効果があがるように感じる。	・それぞれの状況や課題を知り、質問し合うことで、校内の問題や話題が校区の話題とって共有された。	・来年度は、実施時期を遅くして、授業公開や相互参観の後に、それらの感想や質問を共有できる時間とする、より有意義ではないか。 ・中1アンケートも5月末から6月頃にとってもらい、小中ギャップを洗い出せるようにしてから話し合いをしたい。（3-1-④にもあるように）

3-A-③ 授業公開と相互参観	・期間を限定せず、互いに日常の授業を参観できると良い。 ・中学校の先生に小学校で授業をしていただきたい。(T1,T2,専門性発揮・特に数学・英語) ・オンラインも積極的に活用。 ・東小・市川小の小小連携もオンラインで共同作業・共同編集もできる。	・互いに授業を見る期間を設けたが、実際のところ見られない職員もいた。期間を別に設けるなど、全員が見られるようにしていきたい。 - また、期間を設けなくても「いつでもどうぞ」の姿勢をもっていきたい。	・参観の機会はあるが、見に行けないことも多い。 ・外国語で実施しているが、中学校の先生に小学校で授業をしていただくことは教師にとっても子どもにとってもメリットが多いと感じる。	・今年度のような開放日型の相互参観とともに、中学校で授業をお持ちの先生方全員に小学校5, 6年で1年に1回授業をしていただきたい。小学校の職員も中学校でT2をするなど、お互いに積極的に乗り入れをしたい。
3-A-④ 小6アンケートと中1アンケート	・アンケートは継続(実施の細かい点は改善をしていく)	・アンケートの結果を、早めに周知していきたい。また、小中の担当者同士が直接連絡を取り合えるようにしていくことも必要ではないかと感じた。 ・②と同様、ギャップ解消に向けての手中での具体的な手立てを考えていく必要がある。	・本校も同一のアンケートを行い、共有し同じ歩調でできるとよいと感じる。	・活きるアンケートにしていきたい。市川中学校で実際に何に困っていて、そのために、東小と市小が何をすれば解消に近づくのかを、もっと検討し合っていくべきだと感じる。例えば、「小学校までに身に着けておきたかったことはなんですか。」や「小学校のときに取り組んでいたから中学校で生かされていること」など
3-A-⑤ 中学校での研究授業	・教科は理科でなく、他教科でも可。 ・この事業としては、研究授業はしなくても良い。 ・小学校の研究授業に中学校の先生が専門性を発揮していかに関わるのかも検討すると良い。	・何のための研究授業なのかを、周知した上で実施していきたい。「理科の研究授業」という意識が高いまま参観していた職員も見受けられた。もちろんそれも大切ではあるが、「教科担任制」が主軸であることをもっと前面に出すべきだったと感じている。	・リモートでは伝わりにくい部分があるので、可能であれば直接見させていただきたい。	・研究授業をすることは大変有意義であった。配信の仕方については、もっと改善していきたい。来年度も3校全体での研究授業が必要かどうかは疑問に感じるところもある。もっと小規模な授業公開を複数の方が行うのも効果的ではないだろうか。

3-A-⑥ 小学校での研究 授業		・同じ指導主事に指導助言していただくことが一番の目的である。しかし、その分スケジュールの調整が難しくなり、結果、中学校は全職員で参観できない日に研究授業となってしまう。 ・来年度は早めにスケジュールを固めることが大切であると感じる。	同上	同上
3-A-⑦ 小6と中1の交流	・中学入学説明会は継続できそう。 ・花火大会の清掃活動等、中学校が行っているものに小学校の児童会が加わって行くことはできそう。 ・新しいものを入れるのはスケジュール調整が難しい面もある。 ・東小児童は立地的に市川地区の地域や他校と関わるのは難しい。オンラインを活用したい。	・アンケートの結果が、今年度の交流にどこまで生かされたかしっかり振り返りを行いたい。	・進学を不安に思う6年生にとって、よい機会となった。顔見知りの先輩との交流ができれば安心感につながったのだろうが、知っている先輩がいないため、さらに不安を持ったようだった。	・中学入学説明会で中1と小6が交流できたことがよかった。中学生が中心となって進めていたことで中学校へ行つての成長を感じることができた。 ・来年度は乗り入れ授業などとしてさらに交流を活発にしていきたい。 ・合同清掃や合同避難訓練のような小中で交流できる活動をできればよいのではないか。
	B来年度の研究の中心となる課題に対しての考え			
	i 理科の研究について			
3-B-i-① 東小学校での授業	・市川小と東小で気候も差があり、理科の自然観察の指導は難しかった。 ・理科専科が2校を兼務するのは、実験の準備を前日に行うことができないことも準備の面で大変であった。		・小規模校の実態を知っていただくことも有効だと思う。	・理科専科で他校にも行くことが準備の面ではとても大変だった。専科加配が不可欠。 ・理科は、学校にある備品の違いや自然に左右される課題などでやりにくいこともあった。 ・両小学校で同じ指導（理科・外国語）をしてもらえることで、小中ギャップの解消につながる。

3-B-i-② 週1の市中への 参観	・1人の教員が複数回参観するのではなく、小学校の複数の教員が参観する仕組みにしていきたい。 ・教科も限定しないで参観する。 ・3校がより積極的に参観し合うためには、「いつでも」だと難しい面もあるので、システムを整える必要がある。例えば水曜の5時間目は交流の時間と定め、毎週その時間を交代で3校の職員の誰かしらが参観する。専科教員など動ける人が補充要員として、授業の補充に入れば学校の運営にも支障がないだろう。	・小学校の先生との打ち合わせなど、決まった時間があったことが助かった。 ・小学校での導入や展開、中学校での導入や展開など共通するところや違うところなどを交流することができた。 ・中学校での授業の中で、小学校の内容の振り返り活動ができた。	・常に交流を図り、情報交換を行うことは理科の研究には大切だったと思う。今後、他の教科についても同様のことを行うことは難しいかもしれない。	・来年度も理科を研究する、且つ担当が代わるのであれば必要かもしれないが、そうでなければ要らないのではないか。その代わりに、全員が交代で年1回1時間行くのような仕組みの方が二年目として効果があると思う。(3-A-③とかかわる)
ii 小中連携について				
3-B-ii-① 教育課程	・単元配列表とともに教科書でも指導内容を確認できると良い。 ・教科用図書を各校で購入できないだろうか。	・中学校では、単元配列表を修正しているところです。ただ、今年度の修正で中学校教師が何に気づき、何を改善していくかが大切ではないかと思います。	・小学校の学びが、どのようにつながっているのか分かるような一覧表があればよいと思う。	・小中一貫の表はあるが、十分に活用できていないのが現状。もっと、一目で小と中のつながりが見えるようにしたい。(3-B-ii-②ともかかわって) ・教育課程を印刷したものや共有データを3校で共有すれば活用しやすいだろう。
3-B-ii-② 教科指導	・現中1は、情報部会で東小と市川小の6年生の進行具合を揃えていたことで、中学校でも影響なくできた。	・小学校における教科担任制を取り入れることで、教材研究や準備の時間が増える、中学校の教員からのアドバイスが得られるなどのメリットを生かし、より専門性の高い授業の提供(質の高い授業)をすることで学力の向上を図りたい。	・小中相互の乗り入れ授業や、合同授業なども、相互理解・不安解消の点からも考えることはできないか。	・3校の児童生徒のICT技能も、情報を共有し合いながら同じくらい使えるようにしていきたい。 ・小学校・中学校でお互いの教科書を揃え、いつでも見合えるような環境を整えていきたい。

3-B-ii-③ 生徒指導	・ 中学校の先生との関わりに対する不安を解消する場もあるとありがたい。	・ アンケート結果を全職員で共有すること、指導の上でどのような配慮が大切であるか考えていけば、生徒指導にも生きてくるのではないかと思います。 ・ 家庭環境が複雑化してきていることは明らかであり、様々な問題を小中の担任や主任が共有していくことが今後もっと大切になると感じています。 そうしたときに、顔合わせやその他の話し合いの場が生きてくることを願っています。 少なくとも、今年度、一緒に研究を行えたことで、担任同士の連携のハードルが下がったと感じています。	・ 小中で行ったアンケートの追跡調査からも、児童生徒が抱える問題が見えてくるのではないだろうか。	・ どんな小中ギャップがあるのかを明確にすることで、必要な生徒指導も見えてくるのではないだろうか。
梶原指導主事	・ 市川小はチーム高学年を目指して、是非国語算数の交換を継続してほしい。			
望月課長補佐	・ 中学校の授業はスパイラル型。今後は中学にわたす、小学校の分は省くなどの任せる意識も			